# 馬耳東風

9月13日～19日の旅程でタイ バンコク→インドネシア ジャカルタを2年半ぶりに訪問してきた.

コロナ前から何度か足を運んだ地だったが,この間の両国の発展のスピード,将来性には目を見張る物があった.

なぜそのように感じるのか，わが国との最大の違いは何なのだろう.

現地で感じたことは，とにかく若い，業界全体が成長産業として伸びている，そしてその全てがデジタルベースで進められているということである．たとえばバンコクのベッドタウンエリアに現在，50階建ての高層マンションが建設中で，そこは全てペットフレンドリーであるという.

このようなダイナミックな計画は「ペット可」などと制約の中で展開しているマンション経営が主流のわが国ではほぼ不可能であろう．成長の過程であるが故に，新しい物を生み出すチャンスが至るところにあり，それらに向けて柔軟にスピード感を持って進んでゆく，かつての日本が思い出され，なんだか懐かしくもうらやましい気持ちを抱いた.

また，筆者の友人のジャカルタの動物病院は2018年に知り合った当初50名だったスタッフ数が現在100名になり，3年以内に系列病院を5カ所に増やす計画であるという．そして驚くべきことにスタッフの大半が20代から30代前半で英語に不自由せず，インターネットを駆使して日々診療を行っている．しかも皆一様に将来を信じ，期待に胸を膨らませているのだ．ゆとり教育，Z世代などといわれている日本とはまったく違う若者像にふれ，このままでわれわれは本当に大丈夫なのかととても複雑な心境になった.

今はかろうじて優位性を保っているわが国の小動物医療分野も，10年後，いや，5年後にはその立場が逆転することも十分にあり得る.

今回同行した2名の30代の獣医師も目の当たりにした想像以上の現実をいかに同世代に伝えてゆくかを真剣に考えているようだった．日本はいい意味でも，悪い意味でも成熟してしまったのかもしれない．成熟が長期的な安定とその持続を意味するならよいのだが，これだけ激しい世界情勢の変化の中でその舵取りはかなりの困難を伴う.

しかし今更，かの国たちのような成長のシナリオを思い描くことはもはや望むべくもないことは明らかで，そろそろ成長戦略から成熟戦略に真剣に取り組む必要性を感じる．成熟国家の重要な柱は環境･安全･健康といわれている．実は日本の森林率68.5%は世界でも高い水準にあり，山や海に囲まれた四季折々の豊かな自然もよくよく考えればとても魅力的でさまざまな可能性を感じる.

今年の8月，世界中の富豪の子弟が通うイギリスの名門私立校「ハロウスクール」が安比高原に開校したが，その誘致の決め手の一つに日本の治安の良さがあったという．大富豪の彼らにとって最大の悩みの一つが学校に通うわが子の誘拐であり，安比はその可能性がきわめて低いと判断されたというわけだ.

日本の治安の良さは世界の認めるところであり，これも大きな強みになる．そして平均寿命，それを支える医療体制，先進の技術はまさしく世界が注目するところにある.

今ある物を丁寧に見直し，こういった優位性を維持してゆくことがこれからの成熟戦略となるのではと期待している.

帰国したあと何となくモヤモヤしていたが，ひと筋の希望が見えた気がした.　（も）